

2024（令和6）年度

1日[*]

国語

注意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
- 2 問題は声を出して読まないこと。
- 3 問題用紙は二十三ページ、、の二題から成っている。
- 4 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがある場合は、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない。**
- 5 解答は必ず**黒色鉛筆**を使用し、**解答用紙に記入すること。**
- 6 解答はすべてマーク式の解答欄①②…を丁寧に塗って解答すること。
- 7 訂正箇所は、消しゴムで完全に消すこと。
- 8 解答に関係のない符号（?レなど）や文字は記入しないこと。
- 9 解答用紙を折ったり、汚したりしないこと。

一 次の記事を読んで、後の問に答えなさい。

一般に、人間が認識している時間や空間は大きく三つに分類できる。まずは世界時間や世界ヒヨウジュン規格などに代表される等質的で科学的な時空の視座である。さらにこれとは異なり、人間のありようによって見出される時空が存在する。それが環境世界の特質ともいふべき、主体が生きられ、体験させられている時空である。人間はある一定の時空を、科学的な視座とは異なり、その時々気分や意識のありようによりある時間を短くも長くも感じ、またある空間をセマクも広くも、そしてある距離を短くも長くも感じる。

しかし、これらはいずれも人間という主体によって規定され創り出された時空である。しかし、三つ目の視座である根源的な時空はいわば人間が存在する以前からユウキウウの時間と広大な宇宙に在り、人間はいわばその時空の一隅で一瞬を過ごすだけの存在である。選びようもなくこの時空に生み出され、運命ともいふべき人とめぐりあい、ともにつかの間を過ごす。家族や家庭もまた、この根源的な時空のただなかにまさに存在するのである。

ユクスキュルは「生命を有する主体がなければ、空間も時間も存在しない」と語り、フツサルは、生活世界には「単に論理的、数学的でない生き生きとした空間性時間が帰属している」と述べたが、いずれも主体の視座が感じられる環境世界の時空の特性を捉えている。さらにハイデッガーは、世界内存在としての現存在のこの世界におけるありようについて、人間は「〔内世界的に出会われる存在物〕の許にある存在として、〔世界〕の内ですでに存在するとともに、己に先立って存在する」といい、人間が環境としての枠組みのなかにただひたすら受動的に存在するのではなく、主体として客体に対応しながらその関係性を見出しているという。

ハイデッガーはこのように世界が何もないところから出発しているものではないことを示唆しながら、被投性という言葉を用いて、人間が日常生活においてすでに一定の世界に投げ出され、運命づけられている、そのような気分が覆われる存在であることを指摘するとともに、他方、企投性としてのありようを説いた。企投性とは人間の企てによって世界が異なることを意

味するものであり、人間がその自由なありようをもって、可能性を見出すことができる存在であることを示唆したのである。総じて、時空にすでに投げ出されている被投的世界において過去を引き込みながら、また可能性を拓く意味での企投性のありようをもって未来を想い、現在を生きているといえよう。まさに生き生きとした空間と時間がそこにある。

家庭は人間が人間として存在する世界として、自覚的な主体とその他の人やモノとの相互的で動的な関係によって築かれ生きたる世界であり、その時空に根付き、住まうことができる最も身近な世界として人間が真に生きてゆく起点である。その起点が不安定な限りでは人間はその他の世界にも信頼を拡げることとはできない。家庭は意思ある人間にとって、他の生物にはない自己存在の証しとして重要な意味をもつひとつの時空である。

日本では **HOME** をイメージする際には家族の存在は不可欠のようである。社会学者テンニエスは、「すべての信頼に満ちた親密な共同生活」の典型としてゲマインシャフトを特徴づけ、そのゲマインシャフトの発展的な形としてのゲゼルシャフトを位置付けた。ゲマインシャフトに対してゲゼルシャフトは選択意思に基づく利己的な個々の人間関係を基盤に統一^A的な目的のために存在するものとみなして、両者の性格を対比的に位置付けた。ここで用いられたいくつかの単語、すなわち信頼、親密、選択意思、利己的、統一^A的などという言葉は、現代の家庭や家族の状況を語る時、多義的な意味を持って使われる。《 a 》

例えば、信頼や親密性はあるべき姿として、また今や家庭や家族に失われたものとして、選択意思や統一^A的な目的は家庭や家族の課題として、もしくはそれが行き過ぎることへの反省として、である。概ね現代は、テンニエスの考えたゲマインシャフトという世界は家庭においては失われ、そしてゲゼルシャフトとしてのそれが、よい意味にせよ、またそうでないにせよ、現代の家庭をある種象徴するといってもよいであろう。《 b 》

しかしこれらをもって、単に今の家庭がゲゼルシャフト化していると分析し、そこに収められるものなのだろうか。前述してきたことから言えば、人間にとつての家庭には目的に向かって意思決定する自覚した主体が集まっている姿を見出したい。環境世界としての家庭は、一個人が他者とともに^Eクラすことを決意することから始まる。家庭は主体である人間と人間の意思

決定を起点とし、そこから生活に必要で有用かつ有意味なモノが整えられていく。家庭に存在するすべてはそこにいる人間にとって何らかの有意味な連関があり、その人間によって生かされ、人間もまた生きられる世界となる。そして次第に心身に馴染み、親しみが繰り返されていくうちに、きわめて

I

で無駄のない行動・行為となり習慣づけられ、ひいては人格をも育む。その概ねは意識下に沈殿し、一部は家族と共有され、それぞれの家庭の独自の文化や精神となる。《 c 》

しかしながら、もとより個々の家庭に統一的な目的というものが存在するのだろうか。ゲマインシャフトとしての家庭は、おおよそその目的などはいまいで、それぞれに多様に混在しているのである。家庭は基本的な生理的欲求の充足に始まり、存在証明や自己啓発、自己実現などの高次な精神的欲求を持つ人間のすべての目的に向けて開かれているのである。加えて自由を本質とする人間にとって、その目的は常に固定化することはなく、相対的なものに留まるほかない。それゆえ家庭には単独の論理は存在せず、特定の目的のための正しい手段も存在しない。すなわちあらゆる目的が家庭に存在すると同時に、そのすべてに対して開かれている。《 d 》

問題はゲマインシャフトとしての特性であるところの、そこに集う人々との親密で信頼に基づく関係性が築かれていることが前提になっていることである。前出のハイデッガーのいう被投性の論理、つまりは人間が意識しないうちに背負わされ気分づけられ、位置づけられ運命づけられている時空の

II

の中に自己が存在するということを、人が自覚しなおも引き受けることも求められるのである。家族の人間関係は根本的にはいわばそのような

X

が、人間の企投性をも自覚し互いに尊重する人倫性もまた改めて問われるのである。

ところで英語の *at home* には「家に居ること」「在宅すること」の他に「寛いで、気楽に」などという意味もある。このような根本的気分を、哲学者・教育学者であるボルノーは *Geborgenheit*^B としているが、邦訳では「被護性」と訳出される。*Geborgenheit* は、動詞 *bergen* (隠れる、埋蔵するなどの意) の過去分詞を名詞化したものである。そして、*ge-*という前綴りに示されるように極めて受動的なニュアンスが強いものである。その点から考えると、被護性の「被」という字の意味は深く、すでになにものかによって「護られて在る」というような受け身の解釈とともに、*Geborgenheit* によって人間の世界

における位置を見出すことができる。すなわち人間はすでに根源的な時空に護られて存在するということである。

また、bergenの「隠され、蔵かくされ、大切に保存される」という意味はくつろぎややすらぎ、気楽などという人間の根本的な気分気分に派生する。at homeが在宅しているということ、その家がやすらぎの場であるという意味合いはまさにこれに基づく。

では、やすらぐとはいかなるなことであろうか。「心がゆったりと落ち着いて穏やかなこと」であると辞書には記されている。また、やすらぎという言葉に漢字をあてた「安」の字源をたどれば、家に女性を落ち着かせるさまを示し、ひいては静かに落ち着いていることを意味する。

ハイデッガーは“Geborgenheit”を根本的な気分であるといい、存在論の立場からハイデッガーの影響を受けたボルノーも気分については「精神生活の最下層」にあると規定し、気分を感情と明確に区別した。すなわち感情とは「常に特定の対象に志向的、具体的に、方向づけられているもの」であるのに対し、気分は決して一定の対象を持たないものである。また、気分は「人間の最低の領域から最高の領域までを、全体的に一樣に貫徹する根本的な状態を示す」のであって、その人間の活動全体に色調をあたえてしまうという。ここで重要なことは、気分が精神生活の基礎に位置し、「人間の生が自己自身を知るに至るもつとも単純でもつとも根源的な形態である」ということである。《 e 》

なお、ハイデッガーによれば、人間という存在はあるものに出会って何かを認識したり、特定の感情を持つのではなく、それ以前にそのつどそのつどすでに気分づけられ、根源的にそれらに包まれ関係性を結びつつ意味連関しながらすでに出会っているという。このハイデッガーの気分についての解釈は、理性や意識に対しての否定的な見解ともとれるものであり、気分の主位性や根源性に依拠する考えである。その点から考えると、ハイデッガーとボルノーの気分に関する思考の差異は大きい。前者が人間存在が常に死にさらされていることへの不安や不確かさを視座に置いているのに対し、後者は昂揚した気分として、生への歎びを視座に置いている。

とりわけボルノーは幸福な気分について「人間の幸福な、あるいは少なくとも安らかな気分は、一般にものや人間の内的完

全性やそれ自身に安らう独自の本質が開かれるただ一つの通路である」と述べ、ハイデッガーと対照的である。

しかしながら、これら幸福な気分もまた、「明示できるような理由なしで、こっそりとそれは人間の中に生じてくる」ものであり、いわば人間を襲うものであるとしている。さらに、「**Y**」ともいう。

まことに絶望的な示唆ではあるが、それでもなお、人間の生活はこのような時空に在り、家庭ほど衣食住などの生活の営みが日々繰り返されている時空はない。たとえば、ホテルや旅館などの宿泊施設や飲食店などは、非日常性を演出しつつも、他方では常にくつろぎ、やすらぎを得られるようなしつらいを作り出す。人々は家以外でもそのような雰囲気を持つ空間、そのような雰囲気を醸し出す場所を体験するのであるが、これらが意図された演出であり、配慮された時空であるとわかっていながら、くつろぎやすらぐ気分が瞬時でも誘われることを楽しむ。しかし、家庭を想起させる擬似空間がやすらぎの本拠とならないのは、その空間がそこにいる人間にとってはひとときであり非日常であるからである。すなわち、そこに自らが積み重ねてきた歴史や時間そのものを全面的に十分に委ねられないのである。人間は環境を移動することによって、そのつど異なる体験をさせられているのであり、日常では学校や職場、家庭などでその場に対応すべく心身の緊張や弛緩を繰り返している。しかしながら、個々の時空における体験や歴史は、家庭に居る時間とは比べものにならないくらい小さな存在でしかない。その上で家庭ほどおおよそ衣食住などの人間の生に関わる営みが日々繰り返され、共有しあう時空はなく、ここに人間の家庭の存在、その独自性を見出すことができると思いたい。

（川上雅子「家庭という時空」による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。）

注 ゲメインシャフト——ドイツの社会学者テンニエスは、ゲメインシャフト（共同社会）とゲゼルシャフト（利益社会）という集団類型を提示した。

問一 傍線部(ア)～(エ)のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) ヒヨウジュン

- 1 長年の疑問がヒヨウカイする
- 2 議長選でハクヒヨウを投じる
- 3 フウヒヨウ被害を引き起こす
- 4 土地のヒヨウコウを測定する
- 5 汚れた衣服をヒヨウハクする

(イ) セマク

- 1 言葉をキヨウギに解釈する
- 2 慢心が敗退のゲンキヨウだ
- 3 必要な物資をキヨウヨする
- 4 勉強時間をタキヨウしない
- 5 キヨウゴウ他社を分析する

(ウ) ユウキユウ

- 1 ユウアイ精神に富んだ人物
- 2 古参議員がユウタイする
- 3 ユウユウ自適の生活を送る
- 4 支払いのユウヨを求める
- 5 フユウ層への課税を強める

(エ) クラス

- 1 ボゴの文法を習得する
- 2 複式ボキで記帳する
- 3 小説のコウボに挑戦する
- 4 亡き祖父をツイボする
- 5 ハクボの時間帯を迎える

問一 空欄

I

II

に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- | | | |
|----|---|------|
| I | 1 | 観念的 |
| I | 2 | 継時的 |
| I | 3 | 合目的 |
| I | 4 | 超現実的 |
| I | 5 | 近視眼的 |
| II | 1 | 連続性 |
| II | 2 | 完結性 |
| II | 3 | 可逆性 |
| II | 4 | 対称性 |
| II | 5 | 抽象性 |

問三 傍線部(あ)の語句と同義の語句および(い)の語句の本文中の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(あ) つかの間を過ごす

- 1 うつせみの時を過ごす
- 2 たまゆらの時を過ごす
- 3 おもむろに時を過ごす
- 4 さみだれに時を過ごす
- 5 ひさかたの時を過ごす

(い) しつらいを作り出す

- 1 非日常を強調する
- 2 接客を心がける
- 3 情緒を生み出す
- 4 支度をほどこす
- 5 体験を提供する

問四 本文中の空欄《 a 》《 b 》《 c 》《 d 》《 e 》のうち、次の一文を入れる箇所として最も適当なものを後の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

だからこそ人間が心身ともに解放されるともいえるのである。

1 《 a 》 2 《 b 》 3 《 c 》 4 《 d 》 5 《 e 》

問五 傍線部 A 統一的な目的 とあるが、これについての筆者の考えはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 家庭は、その個々の構成員や家族が良好な関係性を前提に様々な目的をもつことが可能な空間であり、統一的な目的にはそぐわない空間である
- 2 共同社会から利益社会への移行を果たしたことで、信頼・親密性や選択意思と同様に統一的な目的というものも、現代の家庭からは失われてしまった
- 3 家庭は、人間が人間として存在するための最も身近な起点であり、他の生物とは一線を画する自己存在の証しという統一的な目的をもった空間である
- 4 人間が真に生きていく起点としての家庭には、他者と生活するという主体性をもった人間同士の有意味な連関の一つの形として、統一的な目的が求められる
- 5 家庭生活の中で繰り返される習慣が家庭独自の文化や精神へと転じるのと同様に、家庭における統一的な目的も個々の意識下に沈殿する形で次第に形成される

問六 空欄

X

Y

に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

X 1 人間が主体的に作り出した時間と空間である

2 ゲマインシャツトの親密な世界ではありえない

3 強い意志によりその受動性に抗うことができる

4 独自の精神に彩られた唯一無二のものである

5 運命ともいえるべき被投性に司られている

Y 1 幸福な気分のようなものは存在しないとさえ言える

2 家庭において幸福な気分が得られるというのは幻想だ

3 人間はその幸福な気分を自ら生み出すことはできない

4 家庭で幸福な気分が醸成されたのは既に過去のことだ

5 幸福な気分は特段の原因もなく人間に生じてくるのだ

問七 傍線部 B “Geborgenheit” とあるが、このような「気分」についての説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 明確な方向性を持って動きながら人間の活動領域を統括し、精神生活の基盤をつくり上げるもの
- 2 人間の精神生活の根底にあり、特定の対象と結びつくことなく人間の活動全般に影響を与えるもの
- 3 目的なく存在しつつ出来事に対して受け身の態度をとり、人間の精神生活の下位に位置するもの
- 4 静かで落ち着いた感情を作り出すことによって、人間を根源的に護り導き、精神を安定させるもの
- 5 特定の対象を必要とすることなく独立して存在し、人間の精神を外部から隠し守ろうとするもの

問八 本文の内容と合致しないものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 時間や空間は、等質的で科学的な時空、人間のありようによって見出される時空、根源的な時空の三つに分類できるが、このうち根源的な時空から考察をすることで、家族や家庭といった枠組みから人間を捉えることができる
- 2 ハイデッガーは、人間は一定の世界に投げ出された被投的存在であるとともに、未来に向かって能動的に行動する企图的存在でもあると指摘し、過去や未来との関わりを見据えたうえで現在を生きる存在だと考えていた
- 3 現代家庭の変化を語るにあたり、信頼や親密性、選択意思などの語がそれを補強するために使われることがあるが、家庭が人が生きるための起点であることは変わらず、ゲゼルシャフト化しているという単純な分析はできない
- 4 英語の *at home* という言葉は、単に「家に居ること」だけではなく「寛いで、気楽に」ということも含意しているため、ある空間に集まった人々と親密な関係を築いていることを前提として使用する場合が多い
- 5 気分について、ハイデッガーは死への不安や不確実性を根拠においた見解をもち、それは理性や意識への否定的見解にも通じている。一方ボルノーは生への歓びを強調し、幸福や安らぎを人間の内的完全性と結びつけている
- 6 家庭には生活の営みが共有される独自の時間や空間が存在し、個々の独自性があるが、ホテルやレストランは個々の体験や歴史を十分に委ねることができない点で、やすらぎという面では家庭がもたらすものに及ばない

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

純粋な理論物理学者は誰も物理学が技術だなどとはいわないだろう。物理学をエネルギーの蓄積のために利用されるべき研究だ、などとはまったく思ってもいないであろう。自然のうちに横たわる「真理」を探究し、ただその方法として理論を実験によって検証する実証主義こそが、客観的な科学の身元証明だというだろう。自然に埋め込まれた真理を客観的に研究するものだという。この身元証明書を提示することで、科学は技術と区別される、と考えるだろう。自然科学は、あくまで自然の内^Aに隠された真理（法則）を明るみに出すものだ、と信じているだろう。

しかし、そうではない。自然を物質的現象とみなし、その内に隠されたものを取り出して実験にかけるということ自体が、すでに自然を予測可能で計測可能なものへと押し込めていることになる。それは、自然を、何かしら計算上確定可能なものとして、いわば情報システムの一総体として徴用できるものとして扱っているからである。それがすでに「技術的」な思考なのである。だがこの思考そのもの、方法そのものは決して実証もされなければ客観性を主張することもできないのだ。

とすれば、ここでわれわれは、先ほどの「近代」の本質に再び出会うであろう。「近代とは、人間が、自らが生み出したものを相手にする時代である」というあの規定である。もはや、我々は、自然を、自然そのものとして認識することはできない。われわれが認識でき対象化できるものは、一定のやり方で観測や実験によって取り出された一群のデータであり情報である。自然の意味をデータ化可能なものへと変形しているのであり、このデータを「事実」と称して、自然のいわば代理とみなしているだけのことである。

そして、この観測や実験を組み立てているものは決して自然ではなく、人間の生み出した理論であり、技術であった。だから、これは一種の循環構造となる。自然科学の理論がまずあり、その理論に見合った形でわれわれは観測や実験を行っていることになる。検証されようがされまいが、自然（現実）の中にあるはずの「事実」を、「自然」の自己申告として直接に取り出すのではなく、われわれの側の理論と実験の申告に従って取り出し、「事実」として解釈していることになる。その上で、

観測結果であるデータ（情報）を「事実」と称するのだ。実際にはもはや客観的な事実というものは存在しない。科学哲学者のハンソンが述べるように、「事実」は常に「理論負荷的」（N・R・ハンソン『知覚と発見』）なのである。

近代社会の構造とはそういうものだ。近代の社会を支えているものは、自然そのものでもなく、真理そのものでもなく、あるいは、自然や真理への信頼でもなく、自然や真理とされるものを理解するための方法と理論である。われわれが生み出した方法と理論が、われわれの社会を支えている。もはや「真理」そのものは存在しない。いや、「真理」云々について論じることは不可能となっている。人間は自然に続いて真理からも **I** される。人間の理性は、理性的に知りうる対象しか認識できず、永遠の「真理」など認識できないからだ。

a、近代社会は、必然的に、科学（理論と方法）によって支えられるほかないのだが、その科学の正当性を保証するものは、もはや自然の内にある真理性（事実⇨実在）ではない以上、それは、^Bその科学（理論）の実際上の有用性（プラクシス）でしかなくなるのである。科学は、永遠の真理を追求するものではなく、変化する社会のなかでのその都度の有用性に関わるものとなってゆく。

このような現代の科学の性格がメイリョウに浮かび上がってくるのが、量子論の場合であろう。ここで少しだけ量子論のことも意味について論じておこう。

すでに述べたように、もともと実証科学においては、われわれは自然を直接に相手にするわけではなく、現実の自然（実在）が観測装置の示すデータによって表示され、それを受け取る人間が理論構築によって、自然の法則を見出すものとされた。自然そのものでなくとも、あくまで観察データが始点なのである。これが、経験論と帰納論から出発するいわば由緒正しい実証主義である。だから、自然現象が目で見えられ、肌で感じられ、われわれの五感に捕捉されるような状態にあり、観察装置といってもわれわれの五感の延長ぐらいのものなら、それでよかった。

b、20世紀ともなると、対象とする自然や見出すべき自然法則が、もはや五感の延長上にあるものではなくなる。通常の観察ではとても捉えきれない、自然のうちに隠された構造や法則を暴き出そうとするのである。物理学は、自然の本質

を、要素還元論によって細かい要素に分解し、その最終単位こそが実在だとみようとしたり。だがそれはとても通常の観察で捉えられるものではなくなる。

とすればどうするか。「理論」を頼るほかないのである。そこで、最初に理論仮説があり、それを実証するための観察装置や実験装置が作られる。まず理論が先行し、それに合わせて観察装置が準備される。自然は、あくまで観察や実験を通したものととなる。そこでえられたデータをわれわれは解釈して理論仮説の妥当性を論じることになる。

ここでは、実在としての自然についてはもはや何も確たることはいえない。観察や実験装置が自然に働きかけており、その作用によって得られたデータ解釈によって自然法則が理解されることになる。すると、少し極論すれば、人間の側の装置の作り方や、それを通した解釈や理解の仕方が、現実へと作用し、自然の法則を生み出している、といえなくもない。客観的な自然の法則などというものはなくなってしまう。

このことが、少し極端で例外的ケースどころではなく、^c 現実に生じたのが量子論の場合であった。量子論が扱う超ミクロの素粒子世界では、人間の側の観察そのものが、対象である素粒子の世界に影響を及ぼす。よく知られているように、量子論では、素粒子は、観測者（観測装置）の観測によってはじめて粒子の位置と運動量を確定することができる。

しかもこの観測装置そのものがきわめて高度な技術の産物なのである。^c 観測そのものがこの高度の技術に依存している。こうなると、自然の内には ^{II} な法則が確固として存在するとはいえず、またいかなる意味でも、自然という確かな実在があるともいえない。人間の向こうに対象としての自然、もしくは自然法則という「実在」（真理）があるなどというわけにはいかない。自然法則という実在（真理）は、人間と人間の技術によって与えられる（解釈される）こととなり、人間とは別に、その外側に確固として存在するというわけにはいかないのだ。

しかも話はそれではすまない。量子論では、観測以前に存在するものは波動で示される確率的な状態だけだという。そもそも観察される状態は粒子であるのに、どうして観察以前が問題となるのか。もしも観察のみから出発する実証主義であれば、観察以前など問題にならないはずであろう。では、量子論では、なぜ観察以前には、素粒子は波動であるとか、確率的である

というのか。それは、量子力学が波動方程式をもとにしたシュレディンガー方程式にもとづいているからであり、シュレディンガー方程式には複素数が含まれていたからである。虚数は観察できない。観察されるのは実数だけである。ということは、観察装置によって粒子が観察されたとすれば、その背後に観察されえない虚数の状態がもうひとつ⁽¹⁾ヒソソ⁽²⁾していることを意味している。そこに、量子論の位置と運動量についての不確定性原理がでてくる。あるいはまた波動であり粒子であるという実在を想定するコペンハーゲン解釈がでてくる。問題は、虚数という観察しえないものが、超ミクロ世界に出現するという点にあり、それはシュレディンガー方程式から導かれたものなのだ。

ここまでくれば、われわれは、明らかに、通常の、人が認識する対象としての自然理解をもつて自然法則に立ち向かうなどということとはできなくなっている。物質世界の究極が虚数である、などといっても、われわれの理解する自然理解からかけ離れてしまうだろう。ホーキングは宇宙は虚数から始まったというが、これもわれわれの想像を完全に超えてしまうだろう。

するとここで、自然科学はふたつの要因によって支えられていることになる。ひとつは理論（数学理論）であり、もうひとつは、観察装置としての技術である。ニュートン力学以来、物質の運動を数学的に表現するのが近代物理学の習わしとなり、実際には、物理法則は数学化できるという、習わし以上の信念がこの自然科学を特徴づけてきた。

とすれば、ここで数学的表現とは何を意味するのだろうか。確かにガリレオは「自然は数学の言葉で書かれている」といった。これを少し言い直せば、数学は自然の奥にある真理を表現している、ということもできる。しかし、それでもやはり数学は、あくまで自然を表現する方法であって、自然界が数学的な絶対的真理を隠しもつていとまで
III できないとすれば、数学は、この場合、どこまでいっても人間の側が持ち込んだ思考道具というほかない。それは
X。それは一種の思考技術とでもいべきものとなる。

ここで、自然を物質化して対象化することから始まった自然科学は、客観的な自然という概念からはもはやすっかり逸脱してしまい、絶対的な真理や実在という帰るべき故郷をすっかり⁽¹⁾ホウキ⁽²⁾してしまった。そして、それをホウキした途端に、われわれの自然や物質の理解は、われわれの外に横たわる確たる対象ではなく、われわれ自身の認識方法の問題となるのだ。これ

もまた、純粹理性批判におけるカント主義の延長にあるといつてよからう。しかもそれは、数学理論という知的な道具と、実験・観察装置という物的な道具という二つの広義の技術に依存しているのである。

この技術を生み出したものは、五感のような経験的知覚でもなく、観照のような直観でもなく、まさしく活動（プラクシス）であった。理論仮説を表現できる数学理論の導入は、何かを表現する（前に立てる）といういわば思考の活動であり、実験装置は、ある成果を現前にもたらず（前に立てる）ための技術の活動であり、それを可能とするのは、実験装置を作りだす製作の活動なのである。こうして出来上がった体系がもはや、自然の实在の真理証明ではないとすれば、それはどういう意味をもつのだろうか。

科学の体系が真理や实在から切断されたとき、この体系のもつともわかりやすい存在証明は、それが、現実は何らかの作用をもたらずこと、わかりやすくいえば、何らかの意味で役立つている、ということであろう。有用性である。人間の物的な幸福の総量を引き上げるといふこともあるし、あるいは、人間の根源的な知的好奇心を満足させる、といったこともあるが、いずれにせよ、それは自然の内にある真理ではなく、何らかの意味での有用性なのである。

今日、量子論のような素粒子物理学の極限に、たとえば宇宙の始まりの解明という壮大なテーマが開かれ、素粒子を高速で飛ばす高度で高価な実験装置が作られ、また巨大なデジタル望遠鏡が建造されるのも、確かに人間と宇宙のよってきたる起源を知るといふ好奇心の知的欲求に発しているのであろう。だがそれでも、その好奇心が依拠するのは、真理に対する観照（テオリア）というよりも、ひとつの認識のプロセスが次々と生み出した活動（プラクシス）の結果といわねばならないだろう。

（佐伯啓思「科学技術と現代文明の危機」による。）

問一 傍線部(ア)～(ウ)のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) メイリヨウ

- 1 ネンリヨウを補給する
- 2 上司のリヨウシヨウを得る
- 3 ドウリヨウと出張に行く
- 4 実力の差は一目リヨウゼンだ
- 5 病気でリヨウヨウする

(イ) ヒソんで

- 1 センザイ意識に働きかける
- 2 センメイに覚えている
- 3 時代とともにヘンセンする
- 4 あまりにセンリヨな行動だ
- 5 勉学にセンネンする

(ウ) ホウキ

- 1 キジヨウの空論をしりぞける
- 2 徴兵をキヒする人が増えている
- 3 高齢だった作家がキセキに入る
- 4 キブツ損壊の罪で訴えられる
- 5 投票をキケンしないようにする

問一 空欄 I) III に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

I 1 分岐 2 収監 3 疎外 4 透徹 5 迫害

II 1 概括的 2 概念的 3 機能的 4 具体的 5 普遍的

III 1 強弁 2 言泉 3 細論 4 難詰 5 弁明

問二 空欄 a) c に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 a) いわば b) やがて c) ついぞ

2 a) したがって b) ところが c) つまり

3 a) しかるに b) だが c) たとえば

4 a) 畢竟 b) さて c) たいてい

5 a) ところで b) しかし c) 言い換えると

問四 傍線部 A しかし、そうではないとあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 理論物理学者は、実証主義に基づく研究が一種の身元証明書になると信じているようだが、自然を計算上確定可能なものとして扱っている時点で、研究内容に客観性を与えるものではないということ
- 2 理論物理学者は、自然の理論を客観的に研究している者として自らを規定しているようだが、自然を物質的現象とみなして実験にかけている以上、純粋に理論上の学問であるとは言えないということ
- 3 理論物理学者は、自然に備わる真理を解明することが責務だと考えているようだが、人間が自然を自然そのものとして認識できない以上、自然を計算上確定可能なものと見なす思考は必要であるということ
- 4 理論物理学者は、自らの研究を実証主義に基づく自然科学として技術とは区別して理解しているようだが、独自の観測や実験によるデータを客観的な事実へと加工している点で、技術にほかならないということ
- 5 理論物理学者は、自然の中にある真理を実験によって明らかにすることを技術だとは考えていないようだが、自然現象を実験にかけるという行為自体が、技術的な思考に裏打ちされているということ

問五 傍線部B それは、その科学（理論）の実際上の有用性（プラクシス）でしかなくなる とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 近代社会を支えている科学が明らかにしたものが本当に「真理」や「事実」であるかどうかは、社会が刻々と変化していくものである以上、時代ごとにその都度判断されるしかないということ
- 2 科学によって明らかにされるものが客観的な「真理」や「事実」でないのなら、科学が正しいものであると自らを証明する手立ては、人間にとって何らかの役に立つことでしかありえないということ
- 3 自然や「真理」を理解するために人間が生み出した方法と理論が正しいかどうかは、近代社会が科学によって支えられているという「事実」をもって、事後的に証明することしかできないということ
- 4 永遠の「真理」や「事実」を探究し続けるという循環構造が崩れてしまった近代社会においては、科学の正しさを保証するものは、その時々の研究対象にとって有効な方法以外にありえないということ
- 5 人間が生み出した理論や技術による解釈が「真理」や「事実」を明らかにする以上、科学の正しさとは、そうして明らかになったものが理論や技術に合致しているかどうかで判断するしかないということ

問六 傍線部C 現実に生じたのが量子論の場合であったとあるが、何が生じたのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 実在としての自然に基づいて法則を解明するのではなく、人間の認識方法が自然の法則を決定するという事態
- 2 超ミクロの素粒子世界は、観測者が観測をしなければ粒子の位置と運動量が確定できなくなるという事態
- 3 きわめて高度な観測装置なしには、人間の向こうにある対象としての自然が認識できなくなるという事態
- 4 理論仮説の妥当性の根拠として、観察装置や実験装置の製作とそこから得られるデータが不可欠となる事態
- 5 虚数という観察不可能な存在が明らかになり、その存在を理解するための多様な解釈が必要となるという事態

問七 空欄

X

に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 自然が秘めている真理を、言語として記述する道具である
- 2 人間の事情が生み出したものとも、自然の恵みとも言い難い
- 3 自然からの借り物であり、人間はそれに技術と名を付ける
- 4 人間の精神の産物であり、物理学はそれを道具として使う
- 5 科学の生み出した過去の遺産を、物理学が流用しているだけだ

問八 本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 近代の科学者は、理性では知りえない真理の存在に直面したために、理論や装置という道具を用いて迫ろうとした
- 2 筆者は、虚数という観察不可能なものを基礎に置く量子論を、一般の理解から乖離しているとして否定的に見ている
- 3 自然法則や自然そのものが人間の外側に確固として存在するとの認識が誤りであることは、近代以前から自明である
- 4 観測前後で物質の状態が異なるとする量子論の考えは、客観的な自然法則の存在を否定するための好例となっている
- 5 近代科学の依拠する数学理論や観測装置といった道具は、主観を交えず対象に向かう姿勢から生まれたものではない
- 6 今日における宇宙の起源にまつわるような壮大な研究には、わずかながらに科学と真理の結びつきが残っている

国語解答用紙 1日[*]

一

問一
(ア)
①
②
③
●
⑤
(イ)
●
②
③
④
⑤
(ウ)
①
②
●
④
⑤
(エ)
①
②
③
④
●

問二
I
①
②
●
④
⑤
II
●
②
③
④
⑤

問三
(あ)
①
●
③
④
⑤
(い)
①
②
③
●
⑤
問四
①
②
③
●
⑤

問五
●
②
③
④
⑤
問六
X
①
②
③
④
●
⑤
Y
①
②
●
④
⑤

問七
①
●
③
④
⑤
問八
●
②
③
●
⑤
⑥

二

問一
(ア)
①
②
③
●
⑤
(イ)
●
②
③
④
⑤
(ウ)
①
②
③
④
●

問二
I
①
②
●
④
⑤
II
①
②
③
④
●
III
●
②
③
④
⑤

問三
①
●
③
④
⑤
問四
①
②
③
④
●
問五
①
●
③
④
⑤

問六
●
②
③
④
⑤
問七
①
②
③
●
⑤
問八
①
②
③
●
⑥

47点

53点